

座談会

金沢大学の初習言語教育 過去・現状・展望

Teaching Second Foreign Languages at Kanazawa University : Past, Present and Prospects for the Future

とき： 2009年2月17日

参加者： 金子 靖孝 Kaneko, Yasutaka (ドイツ語)

矢淵 孝良 Yabuchi, Takayoshi (中国語)

三上 純子 Mikami, Junko (フランス語)

司 会： 杉村 安幾子 Sugimura, Akiko (中国語)

今日の日本では、「外国語教育」と言うとまず英語が挙げられる。これは世界における国際語としての英語の優位性を考えれば、ある意味当然とも言えるだろう。しかし、英語以外の外国語学習を疎かにして良いはずもなく、多文化共生が求められる現代社会においてこそ、様々な地域の言語・社会・文化への理解がより一層必要とされているはずである。本座談会では、金沢大学において長年初習言語教育に従事してきた三名の教員に、本学の初習言語教育の理念やカリキュラムについて過去から現在までを振り返りつつ、教学上の問題の所在とその解決方法について忌憚ない意見を交換してもらった。そこから、さらに今後目指すべき道を明らかにしていく。

杉村 これより、「金沢大学の初習言語教育」と題して、座談会を始めたいと思います。本日は、この3月に退任されるドイツ語の金子先生を中心として、中国語の矢淵先生、フランス語の三上先生といったベテランの先生方に、本学の初習言語教育を振り返って、今後について考えていただくつもりです。

まず最初に、ここ10年、20年の間で、学生気質というものが大きく変わったと思うのですが、そういったことが初習言語教育にどのような変化を及ぼしてきたかというあたりからお話ししていただけたらと思います。金子先生、いかがでしょうか。

この30年間の大きな変化 カリキュラム・学生気質

金子 ここ数年というのはともかく、共通一次試験が始まって以降、すべて言葉そのものについて学生の力が落ちてきましたね。私はそう思うのですけれども。

それからあと、言葉に対する関心というか、興味が薄れてしまって、ちょっと英語ができればいいという感じになってしまい、ほかの言葉には何の関心も示さない学生が多くな

りましたよね。

矢淵 先生が金沢大学に赴任なさったのは何年ですか。

金子 昭和 46 年、1971 年です。そのあたりの学生は、まだやる気があった（笑）。

矢淵 共通一次試験の導入といった問題もあるかもしれませんが。共通一次からセンター試験とか、いろいろ名称は変わりましたが、要するに受験の在り方というのか、試験の在り方が学生の気質を変えたのか。それとも違う要素があって変わってきているのかということなのですが、勉強の仕方が、センター試験の場合にはそれまでのものとは変わってきたということはあるかもしれないですね。例えば外国語の勉強だったら、和訳の練習とか和文英訳の練習とかを一生懸命やってきた。それが、個別試験では相変わらず出題されていますけれども、センター試験だったらマークシートになりますからね。確かにそういう勉強の仕方というレベルでの変化というのは起きているとは思いますが。

それと、自分を例にして恐縮ですが、僕は兄と 4 歳違いです。兄がまさに団塊の世代なのですが、その世代で、例えば中学校の同級生のどれくらいが大学に行っているだろうかというのを見たときに、多分、1 割いるかどうかです。本当に田舎の、村の小学校、中学校だったのですが、多分、兄の同級生で大学に行ったのは、数えるほどしかないと思います。それが 4 歳違いの僕の世代になりますと、たぶん 2 割は進学するようになっています。それだけ学生がぼんぼん増えてきていることは間違いないですよ。

三上 そうですね。多分、70 年代ぐらいに大学進学率が 20%を超えたのでしょうか。それがこの数年前には 50%を超えていますからね。やはり学生のメンタリティも、進学率と関連して変わってきているということがあるかと思います。大学や教育の大衆化が進んだということですね。

矢淵 それで学生の気質も大きく違ってきて、勉強の仕方そのものも、ひょっとしたら単に大衆化というだけではなく、いろいろな勉強のツールみたいなものが増えてしまった。例えば外国語の勉強といたら、僕らのときは、ラジオ講座を聴いたりとか、テレビ講座だけです。例えば大学で下宿していたらテレビがないというような学生も結構多かったのだ、ラジオで勉強という人たちが多かったと思うのです。

それが今やいろいろな教材が出ています。数年前、10 年以上前ですかね、教材が豊富になりだしたのは、中国語の場合には、僕らのころなんて本当にわずかな教材しかなかった。例えば日本語に訳せば「私は新中国を見たい」。いつの話だよというような、そういう教材でした（笑）。それが大きく変わったのは...、やはりもう 20 年くらい前には変わっているかもしれません。そういったことが、やはり学生の勉強の仕方に変化を及ぼさざるを得な

かったのだとは思っています。

杉村 具体的にどういった変化が教育現場で見られたかについて、例がありますでしょうか。

金子 あまりはっきりは言えないけれども、ともかく金沢へ来てびっくりしましたよ、あまりによくできるので。赴任前に1年間非常勤で勤めた大学があるのですが、そこはもうすごくて(笑)。その大学では、最初の授業の前に主任の先生から「先生方の期待している学生とは違いますから、気楽にやってください」と言われまして。それが金沢に赴任して最初の授業が医学部の2年生でした。ゆっくり授業を始めたら、30分でもう予定のところが終わってしまったのです(笑)。それでその後は散々予習をしていき、これはできないだろうと思ったら、学生はすらすら訳してしまうのですよ。どこかで使った教材なのかと聞きましたら、「いや、初めて使う教材です」と。あまりにできるので逆にこれは弱ったなと思った。

三上 夢のようですね、今となっては(笑)。

金子 その当時は、卒業に必要な初習言語科目の単位数が8単位で、確か1年前期で週2コマ、1年の後期と2年前期は3コマぐらいやっていたのではないですかね。それで2年前期は2コマでした。

矢淵 多分8コマやっていたと思いますよ、1年半で。必要単位数は今も変わりませんが、当時は授業時間が多かったのです。

金子 多分当時は、後期は英語も入れて外国語の授業が週に4、5日はあったのではないですかね。

矢淵 はい。昔から金沢大学は、課程区分があったときは、教養課程というのは1年半でした。2年間のところもありましたが。

金子 医学部が確か2年でしたよね。医学部を除いては1年半で8コマやったのですから、2年生のときは3コマだったと思いますから、1年生では週に3コマずつやっていたように記憶しています。このように当時は初習言語を1日おきにやっていました。ですから、今と違って、繰り返し繰り返しやりますから、かなり頭に入ったのではないですかね。

三上 そうしますと、必修の段階を終えた時点で、かなり高いレベルに到達していたとい

うことでしょうか。

金子 そうですね、ええ。それに、まだまだドイツ映画が少なかった時期で、ビデオとかもなく、映画館に見に行くしかなかったので、学生は結構、言葉に興味を持っていました。

三上 メディアの発達にもいい面と悪い面がありますね。結局、今の学生たちは生まれたときからいろいろなメディアに囲まれていますから。

金子 そうですね。DVD になった映画は、ほとんど吹き替え版がついていますからね。我々のときはせいぜい字幕で、何としても字幕以外の意味を理解したいと思って、必死になって聞いていたのですけれどもね。

矢淵 以前は土曜日まで授業がありましたから、週 6 日だったのですよね。ですから多分、毎日言語科目の授業が入るような形で時間割が組まれていたのではないのでしょうか。週に英語 3 コマ、ドイツ語 3 コマというような形で、授業をしていたのだと思います。その時代に比べて、今はもう週 2 コマだけ、しかも 1 年でおしまいというわけですから、当然、金子先生が赴任なさったころのレベルまで持っていくというのは無理な話ではあります。逆に言うと、最初から「一生懸命やってもこのレベルか」というような意識が、仮にですが学生の側にあるのだったら、やる気が出ないのも仕方がないかなという気がしないではないですね（笑）。つまり「1 年半、8 コマやったらある程度使えるところまでいく」という気持ちでやるのと、「どうせ」という気持ちでやるのとでは、意気込みが違いますから。

ですから、現在のようになってしまった原因というのは、まず一つは授業数が減ったということですね。

三上 そうですね。初習言語の授業時間数が減った背景にある時代の変化としては、英語が急速に国際語になっていったということが挙げられます。それで英語の重要性がいろいろところで主張されるようになり、初習言語にかかるエネルギーが小さくなったと言えるかと思います。

金子 英語、英語と騒ぎだしたのは、中曽根首相の「留学生 10 万人構想」でしたっけ。あれ以降、やれ英語、英語と騒ぎだしたような。それまではそれほど英語、英語とは騒いでいなかった気がしますね。

矢淵 僕はやはり一番大きいのは、大綱化以降だと思います。つまり 1991 年の課程区分の廃止ですね。あのときに外国語教育に関して求められたことが、結局、その後の金沢大

学のカリキュラム、特に教養教育のカリキュラムに色濃く反映されていますが、言語教育に関して実用性ということがかなり求められてきた。そういう意味で、実用性が重要であれば、じゃあ英語だけでいいのではないかと。

三上 まず大学に入る前に6年間学んできた英語を、何とか使えるところまで伸ばしましょう、ということになったのです。他方で、インターネットなどの普及も、英語を重視する動向に拍車をかけたと思います。

矢淵 教養教育において、「初習言語が必要だ」という議論の前提にあったのは、「世界が国際化していけばいくほど、多文化共生の面がますます重要になってくる」という考え方でした。それがあってから「初習言語も絶対に必要だ」ということで、最初のカリキュラム改定があったときに、理系の学部からは「もう英語だけでいいのではないかと」という意見がある中で、「全学部初習言語が必修、英語が選択」という形になったのです。

これが数年前の2度目の改定のときに、「理系学部は英語が必修、あとは自由選択」という形になり、さらに今年度の学域学類の組織改編に伴って、文系の学校教育学類が「英語のみ必修、初習言語は選択」ということになったわけです。この選択になった結果というのは、初習言語科目の受講者数にどのような影響を及ぼしていますかね。理系は、これはもう最初から予想されたことではあったのですが、もう目に見えてがくんと減りましたし、僕にとってショックだったのは、学校教育学類の学生たちがほとんど初習言語を取らなかったということですね。文系の学生ですから、理系のように基礎科目で忙しいなどということはないのだから、もうちょっと初習言語を取る学生がいるのではないかと思ったのに、いなかったですね（笑）。

三上 学校教育学類の受講者は、理系より減り方が激しかったですね。理系は必修が外れた直後には、ある程度の人数が残ったという感じがありましたけれども、学校教育学類は一挙に、初めの年から減ってしまったという印象があります。これは履修上限などとは関係ないのでしょうか。

矢淵 24単位の履修上限、これももちろん関係するし、もう一つ大きかったのは、2度目の改定のときに言語科目の単位数が一科目2単位に変わったということですね。この二つが絡み合って、結局、履修者が減ったというのは、これはもう認めざるを得ない事実だと思います。

言語科目を2単位にするということに際しては、本来いろいろな議論があって、学習時間に応じて単位数は認められるべきだということで、講義科目の一部は1単位になるという前提があって、言語科目を2単位にしたのですが、結局、みんな2単位になってしまったのです。その結果、初習言語をやらない学生が果たしてどれくらい勉強しているのか疑

問ですね。僕は初習言語の履修には、新しいことを始める、勉強する習慣を身につけるという意味があったと思うのですが、もう外国語の勉強は英語のみというふうになったら、高校の延長のように勉強して、何か新しい勉強をしようという気が起きるのだろうか、その点を一番心配しています。何か特に知識がつくとか何とかではなくて、勉強する癖がつかないことの方が心配なのです。

金子 あと、時間割の組み方には問題がないですか。以前、その日には私のドイツ語1コマだけしか授業がないという学生がいたのです。だから、授業の取り方によっては、語学を全然取らないで、大学に来たら5限まで取れるだけ取ってしまうというやり方をして、わざわざ一つの授業だけに大学に来るのは面倒だと思う学生が割といたようですね。

三上 学生が授業をまとめて取ろうとするのは、大学が町なかから山に引っ越したことも関連しているでしょうね。大学に来るための所要時間や交通費が以前とはかなり違いますから。

初習言語を学ぶ意義

杉村 先ほど、初習言語を学習することの意義みたいなところにもお話が及んだと思うのですが、今の学生に対して、初習言語を学ぶ意義と重要性について、より詳しくお話ししていただけないでしょうか。

金子 以前でしたら、初習言語を学べば「専門課程に進んでから役に立つよ」とそれで済ませられましたが、今は何と言ったらいいか…。

三上 今でも言語科目には、専門課程の基礎科目という側面はあると思います。ただし、それぞれの初習言語について、その言語を学ばないと学問ができないというような専門教育を行なっている学類・コースはあまり多くないのが実情です。

先ほど矢淵先生もおっしゃいましたが、多文化共生という考え方は、私はやはり大切だと思います。最近の学生を見ると、豊かな日本に生まれ育っているせいか、自足的な傾向が強く、他に対する好奇心というものが欠けているように感じられることがあります。初習言語というのはいろいろな地域文化を含みますので、学生たちをそういうものに触れさせることで、外に向かう気持ちを育む働きもあるのではないのでしょうか。

矢淵 昔は「外国語は二つ取りなさい」という制度の中で、何のために勉強をするのかは問われることなく、大学に入ったらやるのが当然という形で外国語は勉強されていたと思うのですが、今はそれに何か理由を付けなければいけないということになっていますね。

僕はやはり、多文化共生というのは勿論非常に重要なのですが、それは学生に言ってもおそらく通じなくて、「何、それ？」と言われかねない目標だと思います。そこでさらに何かを言わなくてはいけないと考えたときに、やはり実用性があるということは、言っていると思うのです。具体的に言うと、先ほどインターネットという話が出ましたけれども、当然、インターネットにはフランス語、ドイツ語、中国語、その他の言語のサイトがあって、例えば中国人が今何を考えているのかを、ネットの掲示板の書き込みなどで見ようと思ったら、当然、中国語で読んでいかなければいけないわけです。むしろそういう情報が必要になるときだってありますよね。そのときに、例えば中国語は漢字で書いてあるから何とかなるだろうと思っても、それは不可能です。きちんと読む訓練をしていないと、到底そういうネットの情報は得ることができない。

僕は、公式の、例えば新聞に載るようなニュースでも、あるいは非公式な、要するにブログの類であっても、その言語を十分こなせない限り、英語ができるだけではきちんとした情報を得ることができないという状況が、もう生まれているのだと思います。むしろインターネット時代であるからこそ、英語だけでは駄目だという時代になってきているのではないかと思うのです。

ただ、実際の授業で、「インターネットでこれができます」というレベルまで教育するかといたら、初級レベルではちょっとそこまでなかなか行きにくいですよ。そこに至るまでの勉強で終わってしまう。本当はそういうのに触れさせて、中級まで引っ張っていきたいのですけれども、それは可能でしょうか。

三上 フランス語では、上級のCのクラスになりますと、ネイティブの先生がそういう授業を担当しておられます。実際にインターネットのサイトについて、どういうふうに情報を取るかを学ぶのですね。

矢淵 それを初級レベルでできないですかね。ちょっと触れるだけでもいいのですけれども。すべての教室が無線LANを使えるような状況になったら、僕はやってみたいと思っているのですが、無線LANを使える教室と使えない教室があって、語学で使っている教室は無線LANが使えないので無理です。この状況を変えてくれたら、せっかくパソコンが必携になっているのですから、ぜひやってみたいと思っています。

そういう意味で、言ってみれば本学の外国語教育の欠点というか、問題点の一つというのは、設備が不十分であることです。これは英語を含めての問題だと思うのですけれども、外国語教育をするような造りになっていない。

三上 教室の座席の配置とかも含めてということですね。

矢淵 そうです。

外国語教育研究センターの初代センター長であった大瀧敏夫先生は、外国語教育というのはコミュニケーション・アプローチだということをずっと主張しておられたのですが、それをしようと思ったら、教室の形から変えていかないとできないですよ。逆に言うと、教室という概念自体を変えないといけないのかもしれませんが、「もう机も椅子も要らない」、「自由に動き回れる空間が欲しい」ということになっていくのだと思います。

そういう点で、教室が主になるとは思いますけれども、設備の面を改善しない限り、僕は英語を含めた言語教育というのはどうしても限界が出てきてしまうと思います。

近年の変化 履修形態・所属別クラス・ペア授業など

杉村 今、設備の問題が挙がりましたが、2006年度から学部別のクラス編成になりましたよね。ああいったカリキュラムの変化に応じた学生の勉強の仕方の変化ですとか、あるいは授業の雰囲気の変化みたいなものはありましたか。

矢淵 ずっと以前は学部別、あるいは学科別の授業があり、最初のカリキュラムの改定後、初習言語は自由に履修できるというスタイルになった。ところが、今度の改定でまた学部別というふうになったのですね。

僕が赴任したころは、学部別、あるいは学科別のカリキュラム・授業スタイルだったのですが、なぜ批判が多く寄せられ、やめようという方向になったのかというと、先生によって評価が全然違ったからなんです。学生が自由に授業を選べず、担当者が固定された形で、受け身の形で入っていかなければいけない。それに対する批判があって、最初のカリキュラム改定は、「学生の選択の自由度を増そう」ということが、一番のコンセプトみたいになったのです。それに対する批判もあったのですが、それが主な改正点みたいなもので、初習言語に関しても学生の自由度を尊重しようというふうになったら、結局どこで開講しても同じで、学生は行きやすいところに行けばいいということになったのですよ。

それがよかったのかどうなのかよく分かりませんね。その結果、何を招いたかということ、学生の自由度を増した結果、学生は「ホトケ」と呼ばれる単位認定の甘い先生のところに集中するような形が生まれたり、それからまた週2コマの授業をやっていても、その週2コマの授業の連携を付けにくいという状況が生まれてしまったのですね。例えば私のA1の授業に出ている40人の学生は、もう一つの中国語の授業であるA2のクラスは、本当にばらばらに、例えば8人の先生に分かれるような状況になってしまっていました。そのような状態では連携も何も無いという反省があって、次のカリキュラムの改定のためにセット授業にしようというふうに変ったのですが、このセット授業に変えて、何か変わったことはありますか。

三上 ペアの連携につきましては、中国語の場合には統一教科書という非常にはっきりし

た連携の方向に進まれましたけれども、フランス語では、個々の教科書選択等については、ある程度自由にやっています。もっとも、会話をネイティブ教員が、文法を日本人教員が担当しているペア形式の場合には、ネイティブ教員とコミュニケーションを取りづらい学生については、日本人教員から注意してもらおうとか、そういう連携はしやすくなったかと思えます。

金子 私の場合は、授業が始まって 4、5 回目まではお互いに連絡を取り合っていたのですが、文法読解が中心の授業と会話中心の授業とでは進度が全然違ってきまして、6 月に入ったら別に相談することもなく、もう勝手にやりましょうということになってしまいました(笑)。文法はやはり一通りは教えないとまずいと私は思うので、結局、それでそのままいってしまいますから、会話中心でいくのとは、どうしてもずれが生じてしまうのです。

皆さん、初習言語の方は、文法を一通り全部やられますか。発音から始めて、ドイツ語だったら最後は接続法になるのですけれども、そこまで行きますか。それとも途中で切ってしまいますか。

三上 フランス語の場合は、必修のクラスでは文法は一通り終えるという方針で進められています。選択のクラスの場合には、あまり速く進むと脱落者も増えますので、自習が可能な教科書を選び、残りは自分で勉強してくださいという形を取ることもあります。

矢淵 中国語の場合には、実は文法といわれると苦しいところがあるのですけれども、ないのかといわれたら、いや、ある(笑)。だけど、今例に出ました第 1 接続法とか第 2 接続法とか、そういった意味でのがっちりした文法というのはいないのです。ですから、中国語は文法事項でどこまで学ぶか、ではなく、語の用法ですとか、表現を中心に初級レベルで必要と思われる事柄を一通り授業で扱っています。

例えばフランス語の場合、形容詞と名詞との関係では、形容詞が先に来ることもあれば、後に来たりもする。ここに何かルールがあるのかといったら、ひょっとしたらあるのかもしれないけれども、でもいい加減な部分もあるのではないかと。慣用的な要素というのは結構大きいかもしれない。そういう意味で、ドイツ語はほとんどそういうルール無視みたいなのではないですよ。

金子 ええ。だから、規則を覚えれば非常に楽だと思うのですが、学生たちはそこをなかなか覚えてくれないのです。文法というものは、大体積み重なっていきますから、基本的なことがちゃんと入っていれば、大丈夫なはずなのですけれども、その基本的なところがなぜかうまく行かない。

三上 フランス語の形容詞の語順について一言説明しておきますと、一般に形容詞は名詞

の後ろに置かれるのですが、日常よく使われる短い形容詞は名詞の前に置かれます。また、後置される場合は客観的な性質を、前置される場合は主観的な評価を表すとも言われます。同じ形容詞が位置によって違った意味になる場合もあるので、複雑な印象を与えるのかもしれない。

矢淵 西洋の言語に比べて中国語が割と取っつきやすいと思うのは、もちろん漢字を使用しているという点は大きいと思いますけれども、動詞の活用がない点です。これは大きいと思います。動詞の活用というのは、例えば英語で、すべて-ed を付ければそれで済むのかといったら決してそうではない、不規則変化がいっぱいあるわけで、それはほとんどの西洋の言語に共通しています。学生たちはそうしたことを面倒だと感じるのではないですかね。格の変化だとか、動詞の変化だとか。

金子 動詞の活用からいけば、ドイツ語なんかはるかにフランス語より易しいのですけれどもね（笑）。

矢淵 だから、そういったことを教えていくときにどうするか、ということが重要になると思うのです。文法も勿論重要ですが、言葉を覚えるというのは結局、あるまとまりとして覚えないと実際に使えないですよ。一音一音覚えていても使えない。

三上 単語のレベルではなく、一つの文が口をついて出て来ないと役に立ちませんね。

矢淵 そういうことです。そういうレベルを初級でどの程度まで教えられるか、ということが重要になってくるように思うのです。つまり、「私は何々します」と文章として、一気にいってほしいわけですよ。恐らくフランス語の場合には、リエゾンがほかの言語に比べて多いと思いますので、あるまとまりとして覚えて、発話してもらわないと、「そんなところで切ったら通じない」ということが結構あるのではないですか。そういう意味で、フランス語の授業では、発音の練習はどれくらいなさるのですか。

三上 これも担当教員によると思います。発音と言いましても、私自身は、まず学生につづり字と音の関係を理解し、覚えてほしいと考えています。なぜかというと、彼らが大学を卒業して、いつかまたフランス語と出会ったときに、もう一度勉強できる基礎力をつけておきたいと願うからです。つづり字と音の関係とが分かっていると、文字を見ても音声化できません。音声化できない言語を再び学び直す気にはなかなかないと思います。ですから、これが発音の第1ステップです。

次に、個々の音については、日本語にない音を誤解されない程度に発音できるようになる、文については、一息に発音するリズム・グループに気をつけて、リエゾンしながらフ

ランス語らしく聞こえるような読み方ができるようになるというのが次のステップです。ただ現実には、文法クラスも、会話クラスもそれぞれ週1コマですから、新出の学習事項をこなすのに忙しく、そう多くの時間を発音に充てることはできません。

けれども、今の教科書はほとんどCDが付いていますので、学生が自発的に家で聞けば、我々の頃に比べればはるかに上達するはずなのです。もっとも、中には一度もCDパッケージのテープを切ることもなく、教科書の最後に飾ってあるだけという学生もいます。やはりどうやって自分で勉強させるかが重要ですよ。

矢淵 そうなのです。僕自身はそんなに発音練習を授業ではしない。あまり直したくもないというか。よほどひどいのは勿論直しますけれども、そうでなければあまり直さない。それと、中国語の場合には、一応、日本人の教員と中国人の教員がペアで授業をしていますので、ネイティブの先生が「どうしてもそれは駄目だ」というのだけ直してもらえばよく、むしろ日本人の教員が発音をやりだしたら、逆に細かいところまで注意しすぎてしまうのではないかという恐れがあります。ですから僕自身は、細かいところまではあまり言わないようにしようと、実は心掛けているわけです。

ところで、三上先生から授業時間の話が出ましたが、授業を週2コマやったとして、全部で30コマ。だけど最初は授業ガイダンスがありますし、試験とかいろいろ考えたら、実質、通年で26回くらいですかね。それぞれの学期で言えば13回くらいですよ。その間にどれだけ教えるかということに関して、ドイツ語ならドイツ語、フランス語ならフランス語で、何か共通の理解のようなものはありますか。

三上 フランス語では、文法については大まかな理解はあります。会話の方は、教科書によって内容がかなり異なりますので、クラスによる違いが大きいかもしれません。

矢淵 そうですか。ドイツ語の場合には、先ほど金子先生からお話があったように、最終的に接続法の知識までいくというような？

金子 ある程度、大まかにではありますけれども、そうなります。会話中心のクラスでは、大体各自の判断でやっているような感じですね。

矢淵 文法事項を積み重ねて行って、最終的にあるレベルへ到達する。それができるドイツ語が羨ましいです。先ほども申しましたように、中国語はそういうのがないのです。ここまでやらなければいけない文法とか、ここの文法までやったら中国語の文章が読めますとかそういうのが実はない。そのために巷間の中国語の教材というのは本当に様々です。

今日の最初の方の話題ともかかわってくるのですけれども、中国語の履修者数が、実は僕が赴任した頃から全国的にどんどん増えていった。その結果、何が起こったかということ、

テキストがどんどん易しくなっていたのです。最初の頃のテキストは難しいものばかりだったのですよ。ところが、学生がそれぞれ大衆化した結果、テキストまで易しくなってしまう。これはまずいのではないかと思います、我々が作り出した中国語テキストというのは難しくできています。

学生に一定程度の予習・復習をさせ、特にあのテキストは復習の方を重んじているのですけれども、復習をしないと授業が理解できないような、そういうものをあえて作った。そして1年間中国語を勉強したという実感を持ってもらう。それで最終的に卒業してからもいいから、中国語を勉強してよかったという気持ちを学生たちに持ってほしい。そういうテキストになってほしいという思いがあります。テキストの内容を易くして学生が取っつきやすくするのは楽なのですが、それはやめようというのが、我々の狙いでした。

金子 ドイツ語も受講生が減って以来、教科書はものすごく易しくなってきました。また、そうするとそれだけでは足りないと思って、それに付加した説明を加えていくと、学生は何か嫌になってしまうみたいなのですね。その教科書の説明事項では足りないと思うから、もうちょっと付け足そうと思うと、逆効果になるのですかね。

三上 学生の大衆化ということを受けて、フランス語も今は易しい教科書が主流です。その結果、ちょうどいいレベルの教科書の選択肢が少なくなっていました。

矢淵 現在と我々が勉強した当時の教科書とは全然違うのですよね。例えば現在の中学や高校のカラフルな英語教材、ああいうのが教科書だと思って入ってきた学生は、絵がなかったり、カラフルでなかったり、文字ばかりが並んだものは教科書と見ないのではないかと、そういう意味で、僕は教材に大学の大衆化というのが最も顕著に表れたのではないかと、実は思っています。あえてそれに刃向かおうと、我々は考えているのですが。

金子 ちょっと話が逸れますが、三上先生、学生は筆記体が読めますか。

三上 筆記体は読み難いようですね。

金子 学生は最近、筆記体ではなくて活字体で書いているので、筆記体で書くと読めないと言って、中学高校でやらないところがあるのですね。

三上 それはあるかもしれません。フランス語の筆記体の文字はほとんど英語と共通していますが、それでも学生は読めないようです。私自身は黒板には活字体で書きますけれども、研修でフランスに行くと、ネイティブの教員の板書は当然、筆記体です。それが読めなかったという話を学生から聞きましたので、やはり教えておかないといけなんでしょう

ね。

矢淵 中国語も発音記号などはアルファベットで書きますが、筆記体で書くことはまずないので問題はありません。

ところで、金沢大学の現行の初習言語のカリキュラムでは、週 2 コマを一年間取って、やめていく学生がほとんどで、中級の B、上級の C までいくという学生は、もう数えるほどと言っていい状況です。全体の延べ人数としても、独仏中の 3 言語を合わせても、100 はいないはずですよ。もっとも、だからといって、なくしてしまうというわけにもいかない。やる気のある学生は一生懸命やるわけだし、それをどうやって伸ばしていくかということになるというか、逆に言うと、どうやったらそうしたやる気のある学生を増やすことができるかということが重要になってくると思います。僕はそういう意味で、今の履修の仕方をもう少し工夫してもいいのではないかという思いがあります。

例えば、半年週 4 コマで 1 年分を終わるようなクラスをつくる。それを全員に課してもいいのではないかと。ただ、これをやる時に一番問題になるのは、週 4 コマの授業を専任だけで全部担当できないので、非常勤の先生を頼まなくてはならない。その場合、非常勤の先生に「2 日出てきてほしい」と頼めるのかというような、そういう問題がどうしても出てくるので、なかなか難しいということはあるのですが。

今の履修の仕方では、何か困ることはないですかね。僕は、慣れてしまうというのが怖いのですよ。このままいった方が楽でいい。一度できた形をそのまま延長していくというか、更新していくのが一番楽なのですよ。特に何かを変えようとする、いろいろなところから抵抗があります。それでも、我々は教育上こういうメリットがあるということを強調して、変えるところは変えていきたいなという思いがあるのです。

それともう一つ、そういうシステムをつくって学生たちが乗ってくれるかどうかに関わってくるのは、GPA の問題があります。GPA のポイントで奨学金給付が決まったり、場合によっては希望するコースに進めるか否かということも GPA で決まったりするということになったら、GPA の得点を上げられる科目を取ろうというふうに考えてしまいますよね。

僕はそういう意味で、なぜ言語を取らないのか、逆に分からないのです。本気で GPA のポイントを上げようと思うのなら、言語科目で頑張れば一番いい成績の S が取れる可能性がある。

三上 初習言語科目は特にそうですね。初めて学ぶ言語で、最初の出発点が一緒ですから。残念ながら今までの状況を見ると、履修上限とか GPA が、B や C の受講者をむしろ減らす方向に働いているような感じがします。

矢淵 現在は形だけアメリカの GPA を導入して、中身が伴っていないのです。例えば GPA を退学勧告にまで使う、履修上限の撤廃にも使うというふうに、きちんとそこを詰めてか

ら始めなければ、今の GPA というのは、結局、何のためにしているのですかね。コース分属が一番大きいのかな。確かに GPA 導入後、学期途中から授業に来なくなったり、試験を受けなかったりという「放棄」というのは、ポイントがゼロ扱いになってしまうので少なくなりましたが、逆に言うとなしで済むように、最初からあまり履修せず、履修登録する科目数が減っています。以前は初習言語の場合、試しに受けてみるかという学生が結構いたわけですね、履修上限がないときには、それが今では、もう最初から受けてもいないということですね。

だから、初習言語の履修者というか受講者が減っている理由というのは、今の履修上のシステムに原因があります。具体的に言えば履修上限とそれから GPA ですね。それが一番大きいのですかね。初習言語受講者をどうやったら増やすことができるのか。

三上 時間割の問題というのもありますね、中級・上級クラスになりますと、いろいろな学類の学生が取る可能性があるわけですが、専門科目の時間割は学類やコースによって異なりますので、皆が取れる時間帯にこれらの授業を開講することは現状では不可能です。一方で、学生は夕方になるとアルバイトに行きますし。

金子 時間割の見直しは、全学的にできないのですかね。「この時間帯は全学類が必ず空けておく」とか。学域は三つですから、「この時間帯だけは必ず空けておく」ということが、努力すればできるのではないのでしょうか。

矢淵 これから、ますますそういうのはひどくなってくると思います。学類再編後、例えば人間社会学域は学類が六つあり、なおかつそれぞれの学類が幾つかのコースに分かれるという形になっていますよね。そうなってくるとそれぞれのコースの独立性みたいなものが結構出てしまって、学類だけでも六つあるのに、そのコースごとに専門の授業を入れたりするので、全体が空くということは期待しようがないと思いますね。

三上 確かに難しそうですね。

矢淵 だから、一番問題になってくるのは、実はこの初習言語のカリキュラムうんぬんといったときに、いつもそれは共通教育、あるいは教養教育のレベルでの問題だとして、その中でしか議論されないことなのです。本来、専門教育を含めた学士課程教育全体の中で初習言語を位置付けないと駄目なのに、どうしても狭い枠の中でしか考えられないものだから、やっているうちに必ずどこかに矛盾が出てきてしまうのです。

それを解決するために、何かいいアイデアがあるのかと言われたら、ちょっとこれは困るのですけれども。

学生のモチベーションを高めるために

杉村 少しよい点にも目を向けたいと思います。少数ながら確実に存在するモチベーションの高い学生たちにとって、例えば短期語学研修ですとか、協定校への留学みたいなものが有効に働いているかとか、こういった点についてはいかがでしょうか。現在、独仏中の三言語とも、語学研修と協定校への派遣留学を行なっていますが。

金子 ドイツ語は極めて有効ですね。数からすれば素晴らしい参加者ですよ。なぜこんなにいるのだらうと思うくらい。今年度は31人参加したというのですから、すごい数だと私は思います。学類別内訳については、聞いていないのですけれども。

三上 フランス語のオルレアン大学への研修は参加者が10人程度ですが、満足度は高いですね。もちろん3週間で飛躍的に語学力が伸びるわけではありません。ですが、ホームステイでフランスの日常生活を体験すると、挨拶一つとっても、日本の教室で学ぶのとは違うリアリティがある、そういうものに触れると学生のモチベーションは高まるようです。また、会話力が足りないことに気づいて、もっと勉強して話せるようになりたいという気持ちを持って帰ってくる学生もいます。

金子 ドイツ語では研修から戻ってきて、検定試験を受ける学生が結構います。やはりある程度、効果はありますね。

三上 フランス語でもそういう学生は増えています。また語学研修に参加して、次は派遣留学でフランスに行きたいと希望する学生も出てきました。

矢淵 中国語は、受講者が多い割には研修の参加者の比率は低い。今年、あるいはその前から、派遣留学に行った学生たちに聞いてみたら、4週間の語学研修などに個人で参加し、その後、派遣留学を決意するというようなパターンが多いですね。必ずしも大学の授業の単位が必要だとか、そういうことではない。

三上 ええ。本来はそれでいいと思います。ヨーロッパの場合はやはり遠いこともあり、初級を終えたばかりの学生だけを送り出すのが心配で、語学研修に教員が随行していますけれども。

矢淵 派遣留学に今までだと3年生で行くケースが多い、あるいは場合によっては4年生のときに行ったりする学生が多かったのですが、最近の就職状況を考えたら、多分、2年次に行きたいという学生がどんどん増えてくると思います。それで2年次に行こうと思っ

たら、1年次の秋に申し込まないといけない。派遣留学生選考の際、1年次の学生をどうやって判定するのか(笑)。

三上 なかなか難しいところですが、今年度、必修クラスに加えて後期からの充実クラスというのを作りましたよね。人文学類・国際学類ではこのクラスを受講した学生が多く、その大部分が11月のフランス語検定試験で4級を受験して合格しているようです。これは一つの判定材料になると思います。

金子 充実クラスは私も後期に担当しましたが、どうでしたか。ドイツ語の場合、学生によって進度がまちまちなのですね。それで結局、最初の4、5回はいいのですが、その後になると、ある文法事項について既習の学生と未習の学生がいるので、結局、また説明し直したりして、また進度が止まってしまう。最初はものすごく調子がよかったですけれどもね。

矢淵 中国語はどうでした？

杉村 進捗の問題はありませんでした。中国語はやはり統一教材を用いていますから、そういう意味では非常に授業を進めやすくはありました。

金子 ドイツ語も統一教科書を使っていれば意外といいかもしれませんけれども、なかなかそうもいかない。ドイツ語はクラス数も多いですし。あと、同じ教科書があると、借りてきている奴がいませんか。とにかく授業で何かやっていれば単位が取れるなんていうのがいて、同じ教科書を使っていると、進度が速いクラスの学生からノートを借りて、答えだけ写すとか。それも写し間違っってMとNを間違っってしまっていたり。ああ、これは絶対に誰かのを借りてきたなと(笑)。統一教科書で一斉に同じ時間帯でやると、ずれてしまうと問題が起きませんか。

矢淵 どうですかね。その辺は分からないですけども、テキストにはドリルを付けて、ドリルは提出させるということになっているので、人のドリルは提出できないですよ。そうしますと、少なくともドリルはどうしてもなんとかしないといけない。

三上 それは、自分でやったものを必ず提出しなくてはならないということですね。

矢淵 はい。だから、人の教科書を借りて済ますということはできないはずですね。それをしなければ、金子先生がおっしゃるような状況になるのは目に見えていたので、あえてドリルは作りました。これはそのテキストを買わなければ付いてこない。別にテキストを

買ってほしいというわけではなくて、きちんと自分で勉強させるということが目的です。

ところで、初習言語の到達目標というのは、結局、先ほどから話に出ている検定試験のあるレベルみたいな形にしましたよね、数値化するという考え方で。一定程度見えるものにするためにはそうせざるを得ないようなところがあって、そうしたのですけれども、本来は、例えば異文化理解というのが教育目標としてあるのであれば、そういうものとは違う到達目標というものも、もう一つ立てなければいけないはずですよね。

つまり、大元にある教育目標が一つは異文化理解であり、一つがツールとしての運用能力だとすれば、ひょっとしたら到達目標というのも二つ掲げるか、あるいはそれをうまく混ぜた形のものにしなければいけないということになる。

中国語の場合、統一教科書でやっているために特にそういう問題が生じてくるのですが、学生の希望するものが明らかに違うにもかかわらず、同じ教科書でやっていていいのかという問題があります。我々の側では、評価の厳正性・公平性を考えると、教科書のレベルをある程度そろえておく必要があるという発想がまず最初にあったので、統一教材という形にしたのですけれども、逆にある面では学生の多様性みたいなものを最初から排除しているというか、考慮していないやり方だということ、少し反省しています。

統一教科書というのはもちろん僕は必要だと思っているのですけれども、1種類でいいのか。2種類ぐらいの可能性を見た方がいいのではないかと。つまり、本当にその言語を一生懸命勉強して、その言語の能力を生かした仕事に就きたいという学生だって、もちろんいるわけですよね。そういった学生はどんどん伸ばさなくてはならない。それに対して、例えばもっと文化のことを知りたい、そのためにこの言語を取りましたという学生がいたときに、そういった学生のための言語教育は、一生懸命その言語の運用能力を高めたいという学生と同じでいいのかどうかということなのです。

今後に向けて 異文化教育の必要性

三上 個人的には、今の授業時間数で一定のフランス語運用能力を養うとなると、私は言語科目の授業に文化的な要素を入れる余裕はあまりないと考えています。そこで、自らの非力もかえりみず、来年度の後期に文化を扱う演習を開こうと計画しています。言語の学習と文化の学習には相乗効果があると思うのですね。もともと言葉に関心がある学生は文化を学んで理解が深まる、逆に地域文化的なことを学ぶうちに、言葉への興味がわいてくるなど、多様な形が考えられると思います。

その意味では、当センターで実施していた「シネマ・ウィーク/映画と異文化理解」という企画で、さまざまな地域の映画を学生に見せるのも有意義だったと思います。映画を見ると、学習している言語が話されるのを聞ける上に、地域独特の暮らし方や社会問題を発見したり、表現様式を通じてその言語圏の美意識に触れたりできるわけですね。フランス語では今年度も映画を見る機会を設けましたが、学生たちの感想の中には、単語や表現

が聞き取れたことの満足感や、初めて見たフランス映画に対して感じた驚きなどがつづられていました。興味の持ち方は千差万別なので、学生たちをいろいろな方法で揺さぶることが、私は非常に大切だと思います。何かに関心を持った学生は自発的に勉強するようになりますからね。

まだ理系も初習言語が必修であった頃の学生ですが、履修登録しては脱落することを繰り返していたのに、あるときシャンソンに目覚めて勉強し始め、最終成績は A、おまけに仏検も自発的に準備して 4 級を 100 点で合格したと言っていました。学生は進んで動き始めたときに本当の力を発揮するものだとつくづく感じました。

先ほど矢淵先生がおっしゃったような目標に近づけるためには、地域文化を紹介する授業や、当センターでやっていた総合科目「異文化理解とコミュニケーション」、あるいは例えば異文化間コミュニケーションの訓練などを、大きなくくりの副専攻のような形で、言語教育とまとめていけるとよいのではないのでしょうか。言語科目の中だけで異文化理解の教育目標を達成しようとするのではなく、他の科目と関連づけて行なうと、学生にもよりアピールすると思います。

矢淵 そうですね。例えば今やっている語学研修も、学生によっては言語科目として登録できるようにして、ある場合には文化的な科目として登録できるようにするとか、ですね。大体、外国語の勉強って、そういうところが結構ありますよね。それを例えばおっしゃるように、今のくくりだと共通教育の言語科目 A なら A という形になっているけれども、さらにそれを含めた大きな何か枠を設定して、異文化理解とか国際何とかというようなコースを作って。

その枠の中に、もちろん今の言語教育、それから例えばおっしゃるような文化に関する講義や演習といったものを、要するにパッケージにするわけですね。それを取った学生は何々の副専攻修了となる。それはいいですよ。それはもちろん、我々だけがするわけではなくて、現在ある専門科目の何かをパッケージ化していく。

そういうのは、特に理系の学生にとっての副専攻、仮に文化的な副専攻を取りたいという学生にとっては、いいのかもしれない。そういうことに興味がある理系の学生だっていますからね。理系の学生は即、数学と何とかばかりということではないので(笑)。文系は文系で一定程度の副専攻みたいなものがありますから、むしろ理系向きにそういうものをつくればうまく機能する可能性はあるような気がしています。

三上 文系向きには専門の学類の中で副専攻的なものが相互乗り入れのような形で作られていても、理系の学生にはそういうものが開かれていないという状況もあるのではないのでしょうか。それに理系の学生の方が、企業に入って、中国の人と一緒に仕事をするといいシチュエーションに身を置く可能性は高いかもしれませんよね。そういうときに、異文化間のコミュニケーションについての知識や一定の言語の運用能力を持っているという

のは、それなりに強みになるのではないかと思います。

矢淵 単に共通教育初習言語という狭い視野で考えていくのではなくて、もっと広い枠の中で考えていく必要があるということですね。それはちょっと前に言いました言語教育を考えると、結局、時間割だけの問題ではなく、専門教育を含めた学士課程全体の枠の中で考えなければ何の解決もできないというのと重なってきますね。

杉村 これまでのお話の中で、金沢大学の初習言語教育における問題点や課題などがだいぶ浮き彫りになったと思うのですが、最後に金子先生、ご退任に当たって、金沢大学の初習言語教育に関して何かお望みになることがありましたら、ぜひおっしゃってください。

金子 非常に難しいね（笑）。ただ、文法一辺倒ではなくて、やはり広い視野で、文化的なこととか多方面に触れて、初習言語の勉強をしてほしいですね。

杉村 本日はありがとうございました。



（左から、三上教授、金子教授、矢淵教授）